

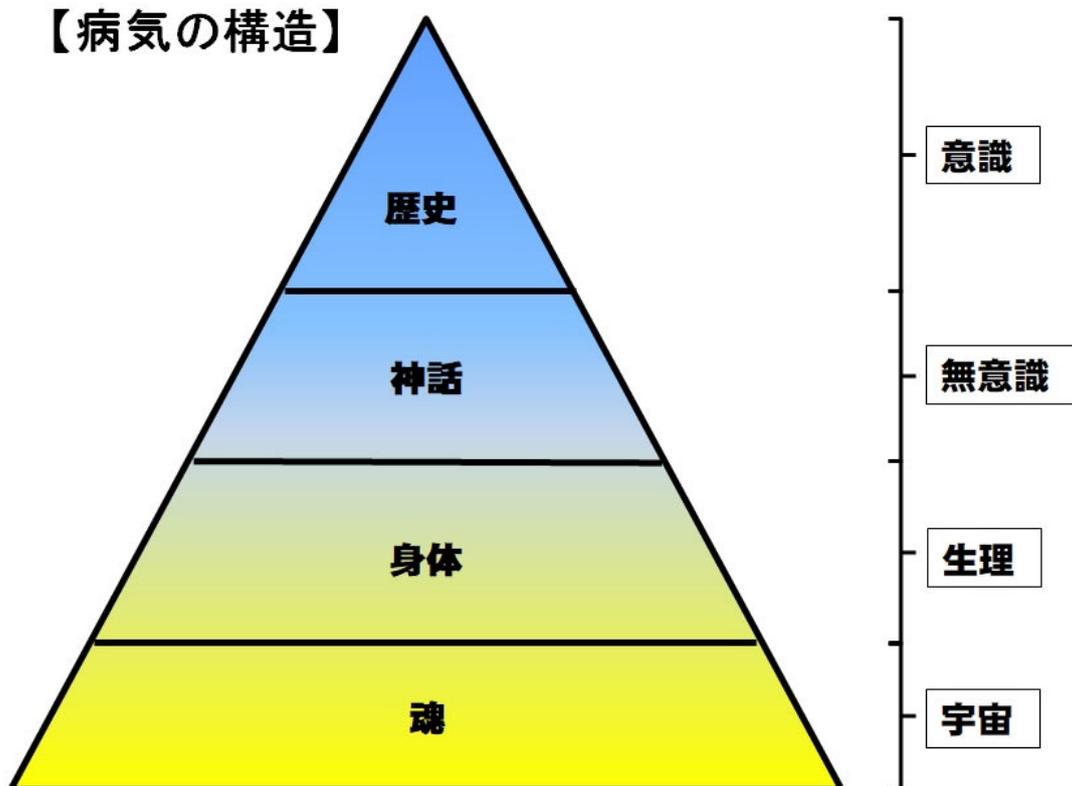
きょうと視覚文化振興財団連続講座「無病息災と視覚文化」

《病草紙》と六道思想 —浄土への憧れ—

京都市立芸術大学客員研究員

加須屋 誠

【病気の構造】



【参考文献】

- 加須屋誠『仏教説話画の構造と機能』中央公論美術出版、2003年
加須屋誠・泉武夫・山本聡美『国宝六道絵』中央公論美術出版、2007年
加須屋誠『生老病死の図像学』（筑摩選書）筑摩書房、2012年
加須屋誠（監修）『地獄絵を旅する』（別冊太陽）平凡社、2013年
加須屋誠・山本聡美（編）『病草紙』中央公論美術出版、2017年
加須屋誠『地獄めぐり』（講談社現代新書）講談社、2019年
加須屋誠『地獄絵 ART BOX』講談社、2019年
加須屋誠『記憶の図像学』吉川弘文館、2019年
加須屋誠『完本六道絵巻』中央公論美術出版、2023年
加須屋誠『呪術と美術』（美術選書）中央公論美術出版、2026年（近刊！）

【はじめに】

「病気」とは一体なにか？ まずはじめに私の所見を述べておきたいと存じます。

＊

発熱や腹痛など、病気とは**身体**の生理的な不調であることは云うまでもありません。生まれてから一度も病気に罹ったことがない人はいないでしょう。そこで、お一人ひとり自分が病気の時の身体感覚を想起してみてください。

＊＊

病気になると、それがなんであれ、私たちは日常とは異なる時間の流れを体感します。一日が非常に長く感じられたり、ふと気がつくとなんとなく間に時が経っていたり。また病床に臥せっている自覚はあっても、自分が何処にいるのか分からなくなる。そんな気分、なぜかしばしば見舞われます。時空間の揺らぎは**神話**の特性です。神話世界では何時・何処で事件が起きたかはつきりしません。しかし、曖昧であるにもかかわらず(と云うよりむしろ)曖昧であるからこそ、それは現実を越えた事象として実際に直感されます。身体的に病気になるとは、健康なときには意識されない、神話的な無意識の領域へと人が足を踏み入れることを意味するのではないのでしょうか。

＊＊＊

病人自身は不明瞭な精神状態に陥ります。その一方で、周囲の人たちは病気を明確に意識し、それに対応するよう努めます。身近な人が病気の場合は、彼／彼女を心配して、効き目のありそうな薬を飲ませ、医師による診断と治療を求め、必要であれば入院・手術を手配します。ただし、病人への対応は、必ずしもそのような親身なものばかりではありません。癩病・結核・エイズなど、現実世界においては病気に対する不合理な恐れ、病人に対する社会的な差別、理不尽な対応が長く続けられてきました。その事実は**歴史**に刻まれています。善と悪、美と醜、自己と他者といった二項対立の枠組のなかで、否定的なものの隠喩として病気は意味づけられてきました。コロナや癌なども例外ではありません、現代にもその歴史は継承されています。

＊＊＊＊

ところで、病気を身体的なものとする見方に対して、それとは別に**魂**の問題としてそれを捉えることも必要です。重篤な病気は死に至ります。心拍と呼吸が止まり、たとえ脳死と判定されたとしても、私たちは病人が無に帰したとは思いません。彼／彼女の魂は身体を離れてどこか別の次元にあるのではないかと考えます。非科学的であると云われても、昔も今も(そして未来も)合理的な科学が生命の全てを解明できることはあり得ません。ゆえに、死とは永遠の謎です。死が万人普遍のものである以上、死を射程に入れて病気を問うことは、一人ひとり個人の問題を越えて、広く宇宙の在り方と深く関わってくる――そう私は考えています。

＊＊＊＊＊

話が大きくなり過ぎました。医学・宗教・歴史・哲学すべての領域について厳密な話を続けることは、私の能力では到底及びません。

そこで、本日は愚鈍な私がこれまで細々と研究して参りました日本中世の仏教美術の観点から、いま提起した病気の諸相について、具体的な事例を挙げながらお話しさせていただければと存じます。



『病草紙』「霍乱の女」場面 京都国立博物館蔵

「霍乱の女」詞書
 霍乱といふ病あり、はらのうち
 苦痛さすがことし、口より水を
 はき、尻より痢をもらす、悶絶
 顛倒して、まことにたえがたし



『病草紙』「肥満の女」場面 福岡市美術館蔵

「肥満の女」詞書
 ちかごろ、七條わたりにかしあ
 げする 女あり、いゑとみ、食
 ゆたかなるがゆへに、身こえ、
 しゝあまりて、行歩たやすから
 ず、まかたちのおんな、あひた
 すぐといへども、あせをながし
 てあえたく、とてもかくてもく
 るしみつきぬものなり



『病草紙』「眼病治療」場面 京都国立博物館蔵

「眼病治療」詞書
 ちかごろ、やまとのくになるお
 とこ、めのすこしみえぬことの
 ありけるをなげきあたるほど
 に、かどよりおとこひとりいり
 きたり、あれはなにもものぞとい
 へば 我は目のやまひをつくる
 ふくすしなりと云、いゑあるじ、
 しかるべき神佛のたすけかとお
 もひて、よびいれつ、このおと
 こめをひきあけて、よくよく見
 て、針してよかるべしとて、針
 をたてつ、いまはよくなりなむ
 とていでゝいぬ、そのゝちはい
 よいよ見えざりけり、つひにか
 ためはつぶれはてにけり、

【六道とは】

	天道	天人五衰	
	人道	生老病死	
	阿修羅道	鬪争敗北	
	畜生道	弱肉強食	
	餓鬼道	飢餓渇水	
		地獄道	等活地獄
			黒縄地獄
			衆合地獄
		叫喚地獄	
		大叫喚地獄	
	焦熱地獄		
	大焦熱地獄		
	阿鼻地獄		

りんね

輪廻

【浄土とは】

- (西方)極楽浄土・・・阿弥陀如来
- (東方)瑠璃光浄土・・・薬師如来
- (北方)霊鷲山浄土・・・釈迦如来
- (南方)補陀落浄土・・・観音菩薩

往生

おうじょう

【重要ポイント】「輪廻」と「往生」
 *六道「輪廻」では生死を繰り返す
 (苦しみの世界)
 *浄土「往生」では生命は永遠不滅
 (幸せな世界)



地獄道(刑罰を受ける亡者)



餓鬼道(飲食が摂れない)



畜生道(弱肉強食)



阿修羅道(戦闘を繰り返す)



人道(穢れた身体)



天道(天人五衰)

【ワンポイント】「天人五衰」

- ①服が汚れる、②頭冠の花が萎れる、③腋の下に汗をかき、
- ④身体が臭くなる、⑤生活が楽しめなくなる

『往生要集』中巻「臨終行儀」

祇園の西北の角、日光の没する所に無常院を
為れり。もし病者あらば安置して中に在く。
およそ食染を生ずるものは、本房の内の衣鉢
・衆具を見て、多く恋著を生じ、心に厭背す
ることなきを以ての故に、制して別所に至ら
しむるなり。堂を無常と号く。来る者は極め
て多く、還反るもの一、二なり。事に即きて
求め、専心に法を念ず。その堂の中に、一の
立像を置けり。金薄にてこれに塗り、面を西
方に向けたり。その像の右手は挙げ、左手の
中にて、一の五綵の幡の、脚は垂れて地に曳
けるを繋ぐ。当に病者を安んぜんとして、像
の後に在き、左手に幡の脚を執り、仏に従ひ
て仏の淨刹に往く意を作さしむべし。瞻病の
者は、香を焼き華を散らして病者を莊嚴す。
乃至、もし尿管・吐唾あらば、あるに随ひて
これを除く。と。或は説かく、「仏像を東に向
け、病者を前に在く」(私に云く、もし別処な
くは、ただ病者をして面を西方に向けしめ、
香を焼き花を散らし、種々に勸進せよ。或は
端嚴なる仏像を見せしむべし)

(中略)

行者等、もしは病み、病まざらんも、命終ら
んと欲する時は、一ら上の念仏三昧の法に依
りて、正しく身心に当てて、面を廻らして西
に向け、心もまた專注して阿弥陀仏を觀想し、
心と口と相応して、声々絶ゆることなく、決
定して往生の想、花台の聖衆の来りて迎接す
るの想を作せ。病人、もし前境を見れば、則

ち看病人に向ひて説け。既に説くを聞き已ら
ば、即ち説に依りて録記せよ。また病人、も
し語ることをあたはずは、看病して、必ずすべ
からくしばしば病人に問ふべし、いかなる境
界を見たと。もし罪相を説かば、傍の人、
即ち為に念仏して、助けて同じく懺悔し、必
ず罪をして滅せしべよ。もし罪を滅すること
を得て、花台の聖衆、念に應じて現前せば、
前に准じて抄記せよ。

『源信』(日本思想大系)岩波書店、1970年



山越阿弥陀図



地獄極楽図屏風

金戒光明寺蔵



「臨終行儀の場」仮想図

「法然上人絵伝」知恩院蔵より
作画

【スライドリスト】

01) 病草紙 (霍乱の女・全図)	京都国立博物館	平安末期 (12 世紀)
02) 同 (霍乱の女・詞書)	京都国立博物館	平安末期 (12 世紀)
03) 同 (霍乱の女・全図)	京都国立博物館	平安末期 (12 世紀)
04) 源氏物語画帖 (若紫段)	京都国立博物館	室町時代 (16 世紀)
05) 伊勢物語「河内越」見立図	東京国立博物館	江戸時代 (17 世紀)
06) 病草紙 (霍乱の女・全図)	京都国立博物館	平安末期 (12 世紀)
07) 同 (霍乱の女・赤子)	京都国立博物館	平安末期 (12 世紀)
08) 同 (霍乱の女・犬)	京都国立博物館	平安末期 (12 世紀)
09) 同 (肥満の女・全図)	福岡市立美術館	平安末期 (12 世紀)
10) 同 (肥満の女・詞書)	福岡市立美術館	平安末期 (12 世紀)
11) 同 (肥満の女・全図)	福岡市立美術館	平安末期 (12 世紀)
12) 同 (肥満の女・男)	福岡市立美術館	平安末期 (12 世紀)
13) 同 (肥満の女・授乳する女)	福岡市立美術館	平安末期 (12 世紀)
14) 同 (肥満の女・構造モデル図)		
15) 同 (肥満の女・全図)	福岡市立美術館	平安末期 (12 世紀)
16) 同 (眼病治療図・全図)	京都国立博物館	平安末期 (12 世紀)
17) 同 (眼病治療図・詞書)	京都国立博物館	平安末期 (12 世紀)
18) 同 (眼病治療図・医師と患者)	京都国立博物館	平安末期 (12 世紀)
19) 同 (眼病治療図・見る男)	京都国立博物館	平安末期 (12 世紀)
20) 同 (眼病治療図・見る女)	京都国立博物館	平安末期 (12 世紀)
21) 同 (眼病治療図・見る男女)	京都国立博物館	平安末期 (12 世紀)
22) 同 (眼病治療図・構造モデル図)		
23) 同 (眼病治療図・全図)	京都国立博物館	平安末期 (12 世紀)
24) 同 (眼病治療図・見る男女)	京都国立博物館	平安末期 (12 世紀)
25) 同 (肥満の女・全図)	京都国立博物館	平安末期 (12 世紀)
26) 同 (霍乱の女・全図)	京都国立博物館	平安末期 (12 世紀)
27) 六道絵(三幅)	兵庫・極楽寺	鎌倉時代(14 世紀)
28) 同(右幅、病苦)	兵庫・極楽寺	鎌倉時代(14 世紀)
29) 六道とはなにか(仏教的世界観の構造)		
30) 六道絵(十五幅)	滋賀・聖衆来迎寺	鎌倉時代(13 世紀)
31) 同(地獄幅)	滋賀・聖衆来迎寺	鎌倉時代(13 世紀)
32) 同(人道不浄幅)	滋賀・聖衆来迎寺	鎌倉時代(13 世紀)
33) 同(天道幅)	滋賀・聖衆来迎寺	鎌倉時代(13 世紀)
34) 浄土とはなにか(輪廻と往生)		
35) 阿弥陀来迎図(全図)	滋賀・光明寺	鎌倉時代(14 世紀)
36) 同(往生者)	京都・光明寺	鎌倉時代(13 世紀)
37) 法然上人絵伝(隆寛律師臨終)	京都・知恩院	鎌倉時代(14 世紀)
38) 山越阿弥陀図(全図)	京都・金戒光明寺	鎌倉時代(14 世紀)
39) 同(五色糸)	京都・金戒光明寺	鎌倉時代(14 世紀)
40) 法然上人絵伝(朝日山信寂房臨終)	京都・知恩院	鎌倉時代(14 世紀)
41) 法然上人絵伝(山越阿弥陀図・臨終の空間仮想図)		
42) 地獄極楽図屏風(全図)	京都・金戒光明寺	鎌倉時代(14 世紀)
43) 法然上人絵伝(山越阿弥陀図と地獄極楽図屏風・臨終の空間仮想図)		
44) まとめ		